

1. 授業の基本情報

- 科目区分：大学院特別支援教育専攻
- 科目名：特別支援教育総論
- 担当教員：特別支援教育講座の教員によるオムニバス授業
- 今回取り上げた授業：第 12 回目授業テーマ「健康障害」として筆者（中野）の担当回
- 授業日時：平成 29 年 7 月 5 日
- 登録学生数：12 名、当日は全員出席

2. 授業研究

①本授業全体の目的：特別支援教育の理念や動向、個別のニーズ理解のポイントなどを学ぶことで、意欲的、主体的な教育実践力を身につける。

②授業内容：授業全体で学習する分野は特別支援教育が包含する全領域であり、教員がオムニバス式にその授業回で設定されたテーマに沿った内容とする。

③筆者が担当する授業テーマとその目的

○テーマ：健康障害

○当該授業回の目的：特別支援教育の対象となる幼児児童生徒は、しばしば健康障害を呈する。代表的な例として「病弱児」という、慢性疾患のために生活規制を余儀なくされている子どもたちが挙げられる。また急性感染症や合併症など、健康障害の問題はどの障害種の子どもたちにも起こり得る状態であり、その概要や基礎知識、医療と医療機関の現状理解は将来、子どもたちの支援にあたるもの

には必須の学習項目である。本授業回では、このような健康問題に専任的に対応する機関である地域の総合病院をフィールドとして、実際の医療業務や現状の課題について体験的に学ぶだけでなく、普段足を踏み入れることがない他職種のフィールドでスタッフと会話しながら学習することを通じて心理的な距離を縮め、連携を画策する際の障壁除去にもつながることも狙いとした。

○実際に行った授業構成

10:20 松山赤十字病院研修担当看護師長から、医療のおかれた現状と課題について説明。（@カンファレンスルーム）

（内容）少子化・超高齢化、先進・高度医療の提供から療育に至る、個別の医療ニーズの多様化、医療費高騰等がすべて同時に進行している。これらの相反するニーズの高まりに対して旧来の方法論のみで対応すると確実に行き詰まることが目に見えているのが医療界の現実である。この状況に対する解決のためのキーワードは、「協働」「地域包括ケア」「チーム医療」であるという説明がなされた。ここで中野が、教育特に本授業のテーマである特別支援教育と驚くほど課題の構造が類似していることを指摘した。

10:40～11:45 院内各部署を巡回し、その業務についてスタッフからの説明と質疑応答が行われた。（各ブース約 15 分）

1) 薬剤部（@調剤室）：常勤薬剤師から、薬剤部業務は単に医師の処方に従って調剤するだけではないことを強調しながら、実際の設備や備品を示しつつ説明がなされた。外来処方を出院処方に変更することにより病棟で専門的な薬剤指導を行うことができるようになり、師長の説明するキーワード「チーム医療」や「協働」の実際を示した。また、学校

教育に関する説明として、学校薬剤師等の活用など、薬剤師と学校との連携方法についても説明および受講生との質疑がなされた。

2) リハビリテーション部 (@リハビリ室) : 専任の理学療法士からリハビリテーションスタッフの種類と実際の業務について、器具や手技をまじえながら説明が行われた。リハビリの理念は特別支援教育と極めて親和性が高い領域であり、実際に特別支援学校のセンター的機能の活用においても協力しながら対応していることを強調された。受講生からは学校現場から発生した懸案事項の具体的な相談のルートなどについて質問がなされた。

3) 検査部 (@中央検査室) : 専任の臨床検査技師スタッフから輸血業務や血球検査などを題材にして、いかに臨床検査が白血病診療の極めて重要な部分を担っているのかが説明された。患者さんと直接面会する時間が少ない職種も「チーム医療」や「協働」に参画していることがの意義や重要性を説いておられた。なお血液型判定キットや顕微鏡供覧など受講生が実際の器具に触れることができた。

11:45-11:50 看護副部長からのまとめと振り返り、中野からの総評 (@カンファレンスルーム)

最初に述べた医療の抱える課題とその解決のためのキーワードについて、実際の業務を通して説明がなされた形式になったことを振り返りつつ、地域包括ケアのなかには教育機関・職種も重要な連携相手であり、特別支援教育が特にその意義が大きいことが確認された。そして、今後のますますの連携推進を目指すべきであるという提案がなされ、授業が終了した。

③本授業受講生へのアンケート

本授業終了時に受講生全員に「本授業で勉強になったこと」というテーマで自由記述してもらった。本授業は平成27年度にも全く同じ構成で実験的に授業を実施しており、アンケートはその時の受講生11人と合わせて23人分を分析対象とした。以下(a)、(b)にその概要を記す。

(a) 各部署における説明に関する事項はほぼすべての受講生が「勉強になったこと」として触れており、学習できたことと振り返ることができていた。

(b) 学校教育と関連した考察を記述したものを、筆者が同一内容と判断したものをまとめた集計を次に示す。

考察内容	人数(割合)
教育現場でも専門性の向上や役割分担を図ったチーム体制を推進すべき	14人(61%)
医療現場の問題は教育現場にも構造的に共通している	10人(43%)
非日常的な体験による楽しさや高揚感、新鮮さ	7人(30%)
学校も地域と積極的に交流すべきであり実際に特別支援教育コーディネーター業務には重要	5人(22%)
ケース会議などで教師と医師(医療スタッフ)との直接対話に結び付けたい	5人(22%)
学校薬剤師を活用して学校も薬の安全管理を図る必要がある	5人(22%)
学校でも応用可能な実践的知識を得た	4人(17%)
時代や社会情勢に合わせた柔軟な対応を教育現場もすべき	2人(9%)
病気や障がいのある子どもの理解のためにも医療の実際を知るべき	2人(9%)
学校の子どもたちにもチーム体制や協働の意義を教えたい	1人(4%)
長期入院児がリハビリを受けており学習や心理的ケアが気になった	1人(4%)

④本授業の評価および研究

本授業が目的としたことは先に述べたように、特別支援教育の対象児が深くかかわることが多い医療や医療機関の現状や動向の理解と、連携への動機向上であった。そのための

授業の工夫として筆者が計画段階から工夫したことは以下の点である。

◇医療業務の具体的な理解のため、通常立ち入れない病院の内部でのフィールド授業とした。

◇大学教員ではなく実際に医療業務にあたっているスタッフ本人に説明を依頼して説得力を持たせた。

◇スタッフの説明の後に直接質疑応答できるという双方向的授業の形式をとった。

◇医療の抱える課題とその解決策までもが、特別支援教育のそれと構造的にも酷似しており、その具体策をみていくことが本授業の軸となっていた。

実際にアンケート内容からも、課題の構造が特別支援教育と酷似していることに言及し、連携に対する積極的意見も多かったことから授業の目的がある程度達成できていると判断した。

⑤地域社会を核とした教育と研究のつながりについて：

本授業は昨年度から今年度にかけて偶発的な着想で実施したわけではない。これまで筆者は他の関係教員と協力して、「重症心身障害児に適切に対応できる」あるいは、「児童生徒の様々な健康問題に対応できる」、「発達障害に関わる」などの教員養成プログラム開発を通じて医学的な実践知が子どもたちの支援に結び付くための授業を展開してきた。その実現には医療機関、慢性疾患自立支援団体、行政、福祉施設など、さまざまな地域の機関と協力し、地域課題の解決という視点にたちながら推進する姿勢が不可欠であった。具体的には、「健康課題のある子どもたちの教育（あるいは教育離脱）は地域課題である」との認識で、子どもに関わる多様な職種の方に講師となっただき、本学の授業に参加していただいた。また本学学生も「長期入院時への学習支援ボランティア」活動のように、教員養成のための学習と地域の子どもの課題の解決をセットにした事業をすすめてきたこともその例である。今回の授業の

ような、患者さんも普段立ち入れない病院内部で実施するという極めて革新的な大学院授業を実現できたことは、これまでに互恵的に地域機関と協働する事業を通して深めてきた関係があつてこそといえる。本学の「知」を地域に還元しながら、学生教育に地域が参加し、またその活動が地域課題の解決としても機能する。このような「循環型の関係づくり」が地域と一体となった互恵的教育・研究活動を実現する重要な条件ではないだろうか。